

英語と日本語の音声対照研究

—日本語発音教育の角度から—

ショク サン ギ
続 三 義

2012年4月から2013年3月まで、アメリカのオレゴン州立大学で1年間の海外研究をし、オレゴン州立大学を中心に、ポートランド州立大学、オレゴン大学などを訪問し、これらの大学での授業見学などを通して、アメリカの日本語学習者における日本語の音声・発音（以下、音声全体に關している時は「音声」という用語を用いるが、個別的な音について言う時は「発音」という用語を用いる）問題を調べた。この報告はその研究の一部である。

音声問題に関しては大体、母音、子音、アクセント、イントネーションなどが含まれる。この報告では前置きとして英日両言語の音声的特徴と両言語の音節について述べる。ここで言う英語と日本語に関しては、英語はアメリカ英語で、日本語は日本の標準語を指す。そして、この研究プロジェクトは中国語・日本語・英語の3言語の対照比較を目標としているので、論述段階では、必要に応じて中国語との比較も入れている。

1. 英語と日本語の音声的特徴

ここでいう両言語の音声的特徴は音声に関する全部の特徴のことではなく、主に語学学習上で關係する一部の特徴に限定して両言語の音の強さ、高さそして長さについて述べる。言語の音の強さ、高さそして長さなどについては、専門的な音声学教科書では取り上げられている問題だが、一般的な語学教育の段階では、真正面から取り組む教科書はそれほど見ないのである。

1-1 音の強さ

音の強さは発音する際、肺から発せられる呼気の強さのことを言う。日本語と英語と中国語の3言語を取り上げて説明する場合、日本語が最も省力的で、英語はその中間に位置し、中国語は最も呼気の強い言語で、中国語を話すときは最も疲れやすい。これらの問題に関しては母音と子音のところでもう一度言及する。

英語と日本語はともに有声音と無声音の対立である。発音するとき、中国語ほど呼気を使わない。

しかし日本語は英語と比べてみると、まず唇歯音（f、v）がない、舌歯音などの摩擦音も少ない（θ、ðなどが無い）。摩擦音を発音するとき、それなりの力を必要とするが、摩擦音の少ない日本語はあまり力を必要としない。それから、呼気の強さは主に子音によって決まるが、日本語には複合子音はなく、更に、日本語の音節の構造から、音節を構成する子音の数が少ない。そのため発音するとき子音の出る割合も少なくなる。それだけ使う呼気が少なくなる。主に有声子音と無声子音をペアとする、複合子音がない、音節を構成する子音の数が少ない日本語は最も呼気を使わない言語として、一番省力的な言語なのである。

それから英語は強弱声調で、日本語は高低声調である。これに関しては、英語は音の強さに関係しており、日本語は音の高さに関係する。これによって、いろいろな音声・発音問題が起こってくる。音の高さのところでもう一度取り上げることにする。

英語 〈□〉 —— 最初の段階・やや強、中間やや強、最後・やや弱 例：bar、park

日本語 〈□〉 —— 最初の段階・弱、中間やや強、最後・弱 例：バーba、パーpa

1-2 音の高さ

音声教育の最初の段階では、音の高さはほとんど無視されている。老若男女の発音はそれぞれ高さが違うはずなのだが、ある言語の全体的な発音を言う際、触れる必要がないと考えられているかもしれないが、本論はその必要が十分にあると考える。

発音の声調やアクセントからいえば、英語は強弱言語、日本語は高低言語といわれている。それで、英語に関して言えば発音の強弱が問題で、対して日本語は高低が問題である。強弱は振動の波形の幅の問題であり、高低は振動の周波数の問題であるから、それら物理的な問題は別にして、発音教育の段階では強弱の問題も実は高低の問題にかかわるので、留意しなければならない。

アクセントの問題に関してはのちほど詳しく言及するが、ここではただ、日本語は発音のやや低い言語であることを言うておく。

This is a pen. (51 11 1 51)

これはペンです。(2 3 3 3 1 0 0)

ここでは、算用数字で音の高さを表している¹⁾。英語の場合は、5段表記で一番高い発音は5になるが、比べてみれば、日本語の場合は、5段表記で最初は2で、4番目の「ペ」が一番高いかもしれないが、その前の「は」と同じ高さと考えてもいい。最後の2つの0は「です」の発音で、1よりも低くなっている。普段の発音でも分かるが、英語は結構高いトーンで発音されている。

1) ここで示す算用数字12345は、音符のドレミファソに置き換えて考えてもいい。言うまでもないが、言語音は、相対的な高さで、絶対的な高さではない。

日本語の音の高さを言う際、日本語のアクセントのことを言わなければならない。日本語のアクセントパターンには、非常に面白い現象がある。日本語教師の多くはそれを知っているだろうが、強調が足りないようである。それは、最初の音節（モーラ）と2番目の音節は必ず違うということである。しかも、最初の音節が高ければ2番目の音節は必ず低く、そして、最初の音節が低ければ、2番目の音節は必ず高い。これを最初から学生の頭の中に叩き込ませることが大切であろう。そして、日本語は基本的に2音節の場合、2つのアクセントパターンしかない。

結構学習時間の長いアメリカの学生でも、「これは」「あれは」の最初の発音を高く発音している。これは英語のアクセントパターンによる影響である。この問題で言えば、言うまでもないが、それは実際は強く言っているのである。これはアクセントの問題ともかかわるが、まずここでいう音の高さの問題と考えたい。

1-3 音の長さ

音の長さの問題は英日両言語に共通するところである。ただし、英語の長音は必ずしも短音に対してのものではない。1つは、強いストレスのかかった音節では、いわゆる短音も少し長く聞こえるのが普通である。もう1つは、英語の場合、長い音と短い音の発音自身がいくらか違いがあるということである。つまり、英語の場合、長音というのは必ずしも日本語のようにただ短音を2倍ほど長く伸ばせばできるというわけではない。

実際、とても簡単な「いいです」に関しても、上手に発音できない米国人学生が結構いる。

英語と日本語、ほかの言語もそうであろうが、音の強さ、高さ、長さの各面で深くかかわっている。強さは高さと関係しているし、そして長さとも関係しているので、英語と日本語を対照研究する場合、英語と中国語の問題よりも少し複雑になっているように思われる（主に長さの問題²⁾）。

2. 英語と日本語の音節

音節の定義は、どの言語に関してもいろいろと問題はあるが、英語と日本語の音節も中身が大分違う。まず英語と日本語の音節のパターンを挙げておく。

英語の音節

- 1) V : a, I, eye, awe, oh
- 2) CV : tea, my, boy, low, saw, poor
- 3) CCV : play, cry, sky, stay, blow
- 4) CCCV : straw, spray, screw, stray

2) 参考文献Sanyi Xu [2013.12] を参照されたい。

- 5) VC : eat, up, it, all, ought, art, ale
- 6) VCC : ask, ax, eighth, apt, passed
- 7) VCCC : uncle, asks, elms, eighths, ants, essence
- 8) VCCCC : uncles
- 9) CVC : bed, dead, teach, cut, race, walk
- 10) CCVC : school, bright, small, drill, glass
- 11) CCCVC : spring, straight, splash, split
- 12) CVCC : test, books, must, beast, cold, milk
- 13) CVCCC : text, sixth, temple, humble, single, next
- 14) CVCCCC : tempts, temples, thousandths, sixths
- 15) CCVCC : brink, blank, stamp, clinch
- 16) CCCVCC : script, strange, sprint
- 17) CCVCCC : prompt, crisped, drenched, glimpse
- 18) CCCVCCC : strength
- 19) CCCVCCCC : scrambled, strengths

(藤井健三 [1986.1.10] p.80~81)

日本語の音節

- 1) V : オ (o)
- 2) VR : オー (o :)
- 3) VC : オン (on)
- 4) CV : ソ (so)
- 5) CVR : ソー (so :)
- 6) CVC : ソン (son)
- 7) CSV : ショ (syo)
- 8) CSVR : ショー (syo :)
- 9) CSVC : ション (syon)
- 10) CVRC スプーン (pu : n)

この日本語の音節パターンに関しては、中国語と英語の音節構造を参考に筆者が考えたものである。英語は長音と短音の区別なく母音 (V) と子音 (C) の組み合わせだけが挙げられており、子音に関しても、特に半母音 (半子音 S) と母音とも区別せず、半母音が子音の中に入れられている。日本語に関しては、子音と半母音 (S) そして母音とからなっている。そして、長音 (R) と短音を区別して挙げた。

英語には開音節と閉音節がある。違う音節における母音の発音が違う。日本語には形の上から開音節と閉音節があるが、実際、開音節と閉音節に分けることには意味がないと考えられる。

英語と日本語、ともに短音節と長音節がある。用語自身は似ているところがあるが、発音上結構違うところがある。1つは英語の短音は強勢アクセントの場合、必ずしも短く発音していないこと。もう1つは英語の長音は短音に対し、少し長いことは事実であるが、実際発音するときの音声器官の形なども違うことである。それに対して、日本語の短音節と長音節は、短音節の1拍に対して、長音節は必ず2拍の長さを保つことが原則である。

日本語の長音節は3つのパターンがある。いわゆる長音を持った長音節、そして促音節、撥音節の3つである。これらは英語を母語とする学習者にとってもややこしい。

長音節——英語との違いから、長さが足りないのが問題。

促音節——英語にない現象なので、長さが足りないのと調音点の緊張が足りないという2つの問題がある。

撥音節——日本語の撥音は必ず前の母音の後ろに付いているが、英語の場合はリエゾン (liaison) の関係もあって n や ng などは後ろの母音とかかわりを持つことが多く、日本語と違う。

スプーン、パターンのような語は3モーラの長さを持っている。

3. 英語と日本語の母音

3-1 母音図

英語と日本語の母音について言う際、英語の母音は、数的に多く、全体的に口の開閉の幅が広く、唇にかかる力も強く、話すときに口の開閉も変化が激しく、全体的に力強く発音する。それに対して、日本語の母音は数が少なく、全体的に口の開閉の幅が狭く、わりと単純で、英語話者にとってはそれほど問題がないと考えてもいいかもしれない。

まず英語と日本語の単母音表を挙げておく。

表1 英語と日本語の単母音

	英語						日本語					
	前		中		後		前		中		後	
	短	長	短	長	短	長	短	長	短	長	短	長
閉	ɪ	i:			ʊ	u:	i	i:			u	u:
半閉	e											
半開			ə	ɜ:	ɒ	ɔ:	e	e:			o	o:
開	æ					ɑ:			a	a:		

日本語の母音はとても単純なように見える。実際もそうであるが、それでも、英語話者の中で問題になっている発音がある。

1つ1つの母音は、英語話者にはそれほど問題ではない。英語話者の日本語の母音の発音の問題点は、基本的には、日本語の母音の英語化である。

(1) 短母音の長音化。これは英語の強勢アクセントの影響である。つまり英語の強勢アクセントなら短母音も少し長く聞こえるので、日本語を発音する際、強勢アクセントで発音すると、長音に聞こえる。たとえば、「これは」の中の「こ」は本来強勢アクセントではないが、英語話者は強勢アクセントとして発音することが多い。それでこの「こ」は長く発音されてしまうのである。

(2) 長音の短音化。つまり日本語の長音の発音の長さが足りない。たとえば、「いいですか」の中の「いい」。これは日本語の「いい」は、元々高低というアクセントが入っていることから、英語話者は英語の強勢アクセントで発音する傾向がある。強勢アクセントはすこし強く聞こえるが、本物の長音ではないので、結局長さが足りないことになる。

(3) 非強勢アクセントの音節中の母音の英語化。例えば、「学生」[gakusei]の中の「ga」、このaを[a]のように発音する。

(4) 「ウ」の発音の円唇化。「ウチ」などの「ウ」を[u]に発音する。

(5) 長音の二重母音化。これは後でも触れるが、たとえば、典型的な英語の「東京」の発音 *tokyo* [toʊkiəʊ]³⁾ のように、2つのoを全部二重母音のように発音している。しいて言えば [ioʊ] は3つの母音と言ってもいいかもしれない。

3-2 英語と日本語の二重母音

日本語と英語の音節表では日本語の場合、半母音を取り上げているが、二重母音は取り上げられていない。これに対して、英語の場合は半母音も二重母音も取り上げられていない。しかし、英語には二重母音が存するが、日本語には厳密な意味での二重母音は存在しない。日本語にあるのは母音の連続だけである。中国語の二重母音⁴⁾を考慮に入れて、英語と日本語のjとwも母音の視野に入れて、それらの組み合わせも二重母音とみなして、日本語と英語の二重母音表を挙げておく(表2)。

基本的には、英語には二重母音があるが、日本語には、普通二重母音があるとは認められない。日本語の場合は、2つの母音の連続である。ただし、上述のように、英語話者は日本語の長音を二重母音的に発音したり、日本語の母音の連続を二重母音的に発音したりするのが問題である。

3) このtokyoのIPA表記は*Oxford Modern English-English Dictionary*によるものである。

4) 中国語の二重母音表は付表1、中国語の二重母音表を参照されたい。

表2を詳しく見ればいくつもの問題を発見できる。たとえば、日本語には [ui] (ウイ)、[iu] (イウ) のような発音があるが、英語にはない。英語話者にはこれらの日本語の発音をよく半母音の組み合わせの [wi] や [ju] のように発音する。それから、たとえば [ea] (エア) は英語に対応する発音がないから、[eə] で対応したり、[oa] (オア:ドア) も英語に対応する発音がないから、英語の [r] のついた発音で対応したり、適当に当てはめて [ɔə] みたいな発音で対応したりする。此の表を詳しく見れば、英語話者の問題点を大体見つけられる。ここではただ以下の例をみることにとどめる。以下の例は、「トウキョウ」は日本語の長音が二重母音の発音になっており、「愛」の発音は母音の連続であるが、二重母音ふうに発音される。

トウキョウ [to:kjo:] → [tɔɔkiɔɔ]

愛 [ai] → [aɪ]

表2 英語と日本語の二重母音

	英語				日本語			
	集中	閉口	j	w	前響 ⁵⁾	後響	j	w
閉	ɪə ʊə		ju ju:	wɪ wɪ:	ɪɪ	ɪu	ju	wɪ
半閉		eɪ oʊ						
半開	ɛə	ɔɪ	je jɜ: jɔ:	we wɜ: wɔ:	eɪ ei oɛ ou oi	ie ue io uo eo	je jo	we wo
開		aɪ aʊ	jæ jʌ ja:	wæ wʌ wa:	ao ae au ai	ia ua ea oa	ja	wa

3-3 母音の無声化

日本語の母音の無声化は、語頭や語尾、そして文末の母音無声化を含め、英語話者にとってちょっと問題になる発音である。たとえば、よく使われる言葉の「好き」[suki] のuはほとんど無声化しているが、英語話者はこれを普通の母音 [u] として強く唇を丸めて発音する傾向である。

4. 英語と日本語の子音

英語と日本語はともに有声子音と無声子音の対比となっている。そして英語のほうは日本語より、子音の数が多し。日本語にない子音もいくつかある。日本人が英語を勉強する際、多くの子音の発音に手を焼いているが、英語話者が日本語の子音を習う際、似て非なるいくつかの子音に注意する必要がある。次に、英語の子音(表3)と日本語の子音(表4)を挙げておく。

5) この「前響(closing)」「後響(opening)」は中国語の二重母音の用語に習った。

表3 英語の子音（中国語の子音表に倣って）⁶⁾

発音法 調音点	破裂音		破擦音		摩擦音		鼻音	側面接近音
	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	有声
両唇	b [b]	p [p]					m [m]	
唇歯音					v [v]	f [f]		
舌歯音					th [ð]	th [θ]		
歯茎音	d [d]	t [t]					n [n]	l [l]
歯音			z [dz]	ts [ts] ⁷⁾		s [s]		
歯茎硬口蓋音			j [dʒ]	ch [tʃ]	ʒ [ʒ]	sh [ʃ]	n [ɲ]	
巻舌音								r [r]
軟口蓋音	g [g]	k [k]					ŋ [ŋ]	
声門音						h [h]		

注：英語の子音は多重構造がある。ここでは音頭子音のみ挙げている。dr, trのような二重子音、strのような三重子音や、そして音頭には来ないが、mplsのような四重子音などはこの表に入れていない。

表4 日本語の子音（仮名、子音のローマ字に国際音声字母）

発音法 調音点	破裂音		破擦音		摩擦音		鼻音	弾き音
	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	有声
両唇	バ b [b]	パ p [p]				フ F [ɸ]	マ m [m]	
歯茎音	ダ d [d]	タ t [t]					ナ n [n]	ラ r [r]
歯音			ザ z [dz]	ツ ts [ts]		サ s [s]		
歯茎硬口蓋音			ジ j [dʒ]	チ ch [tʃ]		シ sh [ʃ]	ニ n [ɲ]	
硬口蓋音						ヒ h [ç]		
軟口蓋音	ガ g [g]	カ k [k]					カ° g [ŋ]	
声門音						ハ h [h]		

4-1 歯茎音

日本語のダ行、タ行のダとタの子音、[d] と [t]。英語と日本語はIPA（国際音声字母）を用いて表記した際、同じ表記の歯茎音となっている。しかし、実際、両言語に違いがある。日本語は中国語と同様に、歯茎音よりも、調音点のやや下がる歯背音・前歯の裏側に舌の前部を当てて発音する。それに対して、英語は歯茎のやや上、硬口蓋に近いところに調音点を持っている。少なから

6) 付表2の中国語の子音を参照されたい。

7) 英語の [ts] は普通、音頭子音としてはあまり用いられない。外来語としてのtsetse flyの発音があるぐらいだろう。

ぬ英語話者の t は [tʃ] に聞こえ、d は [dʒ] に聞こえる。

4-2 歯音

日本語のザ行のザとタ行のツの子音、[dz] と [ts]。日本語では違った行にあるが、音声学的には同じ歯音である。これも歯茎音と同様、英語の舌の位置がやや上にあることから、実際に英語話者の [dz] と [ts] はより [dʒ] と [tʃ] のように聞こえる。

4-3 歯茎硬口蓋音

日本語のザ行のジとタ行のチの子音、そしてサ行のシの子音、[dz]、[tɕ]、[ɕ]。国際音声字母を使って表記する際、これまでこの3者は往々にして、[dʒ]、[tʃ]、[ʃ] と表記されていた。しかし、このように表記すると、舌の位置はやや上の硬口蓋に近いところになってしまう。近年来、新しい表記が用いられるようになり、英語話者の問題点もよりスムーズに解決できそうである。

今までの研究の中で、たとえば日本語のジの発音は英語の [dʒ] と同じで、「ジョウジ・情事」の発音は英語の George [dʒoːdʒ] とほとんど同じであると言っている⁸⁾が、子音における舌の調音点を間違えているのではないか。

4-1、4-2、4-3を通して言えることは、[d]、[dz]、[dʒ]などは、日本語は中国語と同じで、中国語のこれらの発音は有声子音こそではないが、調音点は日本語と同じということである。これらの音は発音するとき、舌の先を下の歯の裏（歯背）につけたまま発音している。これらの発音に対する、英語の歯茎音を始めとする一連の発音はすべて上の前歯の歯茎、または硬口蓋のところに調音点を持つので、根本的に違う。こういったところをきちんと把握しなければならない。

4-4 日本語の弾き音

日本語の弾き音 [r] は、英語話者にとってちょっと難しい発音である。側面音としての英語の [ɹ] は、舌のつけ方が強すぎる。しかし、多くの学生は日本語の表記に惑わされて大体英語の [r] で発音している。

4-5 硬口蓋摩擦音

日本語のハ行のヒの子音 [ç]、これまでヒの発音は [hi] と表記することが多かった。英語の調音点はより奥にあるが、日本語の場合は、硬口蓋にあるので、英語よりずっと前よりである。

8) 藤井健三. [1986.1.10] p.11を参照されたい。

4-6 撥音と促音

英語と日本語の音節のところで、これらについてはすでに言及している。日本語の撥音は仮名で表記する時はただの「ん」だけであるが、実際の音韻環境ではいくつかの異音ができる。これは英語話者にはそれほど難しいことではない。ただし、どのような場合でも、撥音は1拍、1モーラのスペースを取っている。これは英語とも違うし、中国語とも違うところである。

英語話者の撥音は、全体的な問題はモーラの長さが足りないことである。1つは、英語の音尾子音の n や ng は、もともと伸ばして発音しない。もう1つは、連音（リエゾン）で音尾子音は後続する音節の頭母音と結合して発音される。それで日本語の撥音を発音する際も、ほとんど伸ばさない。英語話者の撥音を矯正する際、1拍のスペースを取るよう指導することが肝心である。

促音も日本語独自のものと思われる。中国語にも英語にもないものである。サ行音の場合、前の音節を発音した後、子音の s や [ɕ]（シの子音）を1拍伸ばして次の母音を発音するが、そのほかの場合、前の音節を発音した後、1拍のポーズを取って次の音節を発音する。そしてこの場合、1拍のポーズの間、調音点で緊張を保つことがポイントである。

英語話者の促音発音の問題は、長さが足りないのと調音点の緊張度が足りないという2つの問題がある。しかも時々、英語話者は英語の強弱アクセントパターンで日本の促音と後続する音を発音しようとする。たとえば「がっこう」の発音を「が」を強く言うだけですぐ後に「こう」を続けようとする。しかし、聞く耳にはやはり「がこう」としか聞こえない。

5. 英語と日本語の声調（アクセント・トーン）

英語は強弱アクセントで、日本語は高低アクセントである。日本語は単語アクセントまたはフレーズアクセントで、1つの単語あるいは1つのフレーズにアクセントは1つしかない。これは強弱アクセントしかも単語ごとにアクセントが1つ以上ある英語との大きな違いである。

日本語のアクセントの特徴はまず、その最初の2つの音節（モーラ）の発音の高さが必ず違うということである。すなわち1音節目の発音が高ければ2音節目の発音は必ず低くなる、その代わり、1音節目の発音が低ければ2音節目は必ず高くなることである。これはもう1つのことも真実であることを証明する。すなわち日本語のアクセントはいったん下がってしまえば、その単語なりフレーズなり、その音節の数はいくつあっても、その下がったままのアクセントを続けていかなければならない。これらは単語内では強弱・強弱の連続のアクセントの英語と大きく違っている。英語話者は、英語の強弱アクセントで日本語の単語ごとにまたは自分たちが理解している文成分ごとにアクセントをつけて読んでいる。

わたしは、アメリカ人です。

多くの場合、英語の強弱声調は日本語の頭高型の発音に近いように聞こえる。

日本語：愛、英語：I

ただし、日本語はいったん高い音から低い音に変わると、その単語なりフレーズなりが終わるまで低い音が続く。しかし、英語は強音の後、弱音があれば、その後ですぐまた強音（第2アクセント）が来ることが多い。

お巡りさんが 来ました。

英語話者の日本語声調の問題点は、日本語を単語ごとに、あるいは自分たちが考えている区切りごとに強弱の声調をつけて発音していることにある。

ここで挙げている「わたしは、アメリカ人です。」と「お巡りさんが 来ました。」は後で述べるプロソディーとも関係するが、ここでは、文成分、つまり単語なりフレーズなりのレベルで述べている。

6. 英語と日本語のイントネーション

言葉のイントネーションを教えるとき、大体平板、下降、上昇といういくつかのパターンに分析することができる。多くの場合、日本語も英語も同じパターンである。ここでは上昇調についてのみ述べることにする。

上昇調のイントネーションはおもに疑問文に用いられる。英語と日本語では、その上昇のパターンが違う。その全体的な問題に関しては別の機会に譲るが、ここでは2つのことについてのみ言及する。

1つ、英語の上昇は文の最後の成分の強音の置くところに上昇のポイントがある。

Are you going to Portland? /Do you go to Portland?

この発音では、Portのところは高く強く、そしていったん下がって、landのところでも軽く上がる。それで次のような日本語を言う時にも英語のパターンになってしまう。

あなたはポートランドへ行きますか。

英語話者は日本語の最後の「行きますか」の「いき」を高く低く、そして「ます」も高く低く発音し、最後の「か」をまた上昇させて発音する。

もう1つは、学生の普段の会話の中でも、教師が使う「guess」というストラテジーに関連して、学生は単語ごとに上昇調を使って当てていく。そして、文（センテンス）を言う際にも、たとえば次の文は、最初の主語も高く上昇し、そして文の最後の単語全体にもアクセントを置いてしまう。

あなたも いく？

ここで強調したいのは、日本語の上昇調は「く」にあるが、英語話者は「いく」の全体にアクセントを置くことである。

中国語の上昇調は中国語の単音節声調のため、文末助詞がないとき、非常に微妙に感じられるの

に対して、日本語の場合、わりとはっきりしている。文末助詞のない英語が、文末の単語にアクセントを置くというストラテジーから日本語を話すときにもそれを使おうとするのが、負転移ということになる。

それから、英語は句と句の間で短いポーズを取る場合、上昇調を伴うことがよくある。日本語も、強調の場合、文中でアクセントをつけることはあるが別の問題である。これも日本語のイントネーションの使用に影響を与えている。

次のような問題もあるだろう。

He drank three cups of **wine**.

彼はワインを **3 杯** 飲みました。

英語は恐らく wine にアクセントを置くが、日本語の場合「3 杯」にアクセントを置く。こういった問題についてはまた機会を改めて検討する。

文のプロミネンスは文のイントネーションに関係するが、それは音声の高低問題というよりも強弱に関係するので、プロソディーのところでも取り上げたい。

7. 英語と日本語のプロソディー

ここでは英語と日本語のリズムとメロディーの問題に簡単に触れる。

単語・フレーズごとに強弱声調のある英語はおのずと強弱のリズムを構成するとともに強弱のメロディーも構成している。音節言語としての日本語はまず、音節のリズムを構成する。そして単語・フレーズごとに高低声調を持つ日本語は高低のメロディーを持つ。

古池や蛙飛び込む水の音

英語話者は英語の強弱アクセントで日本語のリズムを読むことが問題である。

文のプロミネンスは強弱の問題にかかわる。しかし、それは英語の強弱声調とはまた違う次元にあるものである。これは言語の共通する問題であろう。ここでは深く言及することをやめ、英語と日本語のプロミネンスの違いのもっとも簡単な例を挙げておくことにする。

What is this? これは**何**ですか？

What is **that**? **それは**何ですか？

謝辞

アメリカでの1年間の研究で、日本語教育、日英音声研究に関しては、次の多くの先生方々のお世話になった。オレゴン州立大学では、中島節子先生のご高配で、日本語 I のルーク・山口先生、中島節子先生、日本語 II の中村富美子先生の授業をそれぞれ聴講、ポートランド州立大学では、Patricia J. Wetzel 教授のご高配で、日本語 I の木稲枝美子助教授、西牧健太先生、Bond 先生、日本

語Ⅱの渡辺素和子教授の授業をそれぞれ聴講、オレゴン大学では、出丸香先生と橋本玲子先生のご高配で、日本語Ⅰの橋本玲子先生、日本語Ⅱの中楯尚子先生の授業をそれぞれ聴講した。さらに出丸香先生に個別的に日本語の発音及び教授法などについてお話を伺った。これらの先生方々に心から感謝の意を表する次第である。

付表1：中国語の二重母音表

	Chinese			
	Front	Closing	Opening	Back
Close	ie ye ue			iə yə uə
Close mid		eɪ əɔ	uɤ	
Open mid			iɛ yɛ	
Open	iæ yæ uæ	Ai aɔ	iA uA	ia ua

(Sanyi Xu 2013.12)

付表2：中国語の子音表

pronunciation place	Plosive		Affricate		Fricative		Nasal	Lateral approxinant
	<i>voiceless</i>		<i>voiceless</i>		<i>voiceless</i>	<i>Voiced</i>	<i>Voiced</i>	<i>Voiced</i>
	unaspirated	Aspirated	unaspirated	Aspirated				
Bilabial	b [p]	p [p']					m [m]	
Labio-dental					f [f]			
Alveolar	d [t]	t [t']					n [n]	l [l]
Dental			z [ts]	c [ts']	s [s]			
Alveolo-palatal			j [tɕ]	q [tɕ']	x [ɕ]	y [j]	n [ɲ]	
Retroflex			zh [tʂ]	ch [tʂ']	sh [ʂ]	r [ʐ]		
Velar	g [k]	k [k']			h [x]			

(Sanyi Xu 2013.12)

[参考文献]

续三义. [1993] 《日汉英语音对比研究》北外校庆50周年论文集
 —— [1996.3] 《汉日两语元音的对比研究》《語学教育研究論叢》(第13号) 日本・大東文化大学
 —— [1998.5] 《鼻辅音和元音——n、ng教学的误区(英、日、汉对比研究)》《汉日语言研究文集》第一集 北京出版社
 —— [1998.5] 《汉日辅音对比研究》《汉日语言研究文集》第一集 北京出版社
 —— [1999.6] 《汉日声调对比研究》《汉日语言研究文集》第二集 北京出版社

- [2001.7] 《汉日两语的重音》《汉日语言研究文集》第四集 北京出版社
- [2003] 《从〈义务教育课程标准试验教科书·日语〉看初中日语教学中的语音教学问题》.《试教通讯》2003年第25期(总第95期) 人民教育出版社课程教材研究所
- [2000]、[2005] 对日语语音教程. 北京语言大学出版社, 2000第一次印刷. 2005第二次印刷
- [2003.12] 译注. 日语语音体操(原著:《声を出して読む日本語》塩原慎次朗) 外语教学与研究出版社
- [2005.7] 《关于汉语普通话复韵母》《人文丛刊》学苑出版社
- [2011.4.1] 《日本的汉语语音教学小议——以韵母为例》《国际汉语教育》2010年第4辑
- 张凤桐. [1996] 英国英语语音学和音系学. 四川大学出版社
- 张金生. [2002.1] 《英汉元音对比与英语语音教学》《解放军外国语学院学报》第25卷第1期
- 赵德梅. [1995] 英汉比较语音学. 青岛海洋大学出版社
- 周考成. [1990] 英语语音学引论. 四川大学出版社

服部四郎. [1968] 『音声学』岩波全書

金田一春彦. [1967、1978] 『日本語音韻の研究』東京堂出版

—— [1957、1967] 『日本語』岩波新書

続三義. [1996.3] 「中国語と日本語の声調をめぐる」『外国語学会誌』第25号 日本・大東文化大学

—— [2001.7] 「中国の日本語研究 音声編」《国文学 解釈と鑑賞》7月号 至文堂

—— [2003.12] 「台湾の日本語学習者の発音問題について」台湾日本語文学会18期

—— [2008.3.31] 「日本語と中国語のリズムについて」創造学園大学紀要 第4集

藤井健三. [1986.1.10] 『現代英語発音の基礎——日英音声比較——』研究社出版

J.S.ケニヨン著・竹林滋訳注. [1973.2.10]、[1976.9.1] 『アメリカ英語の発音』大修館書店

Eleanor Harz Jordan with Mari Noda. [1987] Japanese: The Spoken Language, Part 1. Yale University Press . New Haven and London

Lass, Roger. [1984] Phonology. Cambridge University Press

Martin J. Ball & Joan Rahilly. [1999] Phonetics: The Science of Speech. Oxford University Press

Murray, Thomas E. [1995] The Structure of English. Allyn and Bacon

Sanyi Xu [2013.12] Teaching Chinese Phonetics: A contrastive study of English and Chinese language acquisition and language instruction. KEIZAI RONSHU The Economic Review of Toyo University Vol.XXXIX, No.I. Dec.2013